

# 現地活動報告書

2020年2月4日～2月18日

プノンペン州、シェムリアップ州、コンポントム州



渡航メンバー

2年生

阿部明香里、猪野遥人、入江翔大、後藤亮一、佐藤楓、須藤大介、山口玖美伽

1年生

大谷佑真、曾我希、田中紗也香、増子みく、若松佳子

# 目次

目次	2
PART1 はじめに	3
団体紹介/これまでの活動	4
お世話になった方々	5
カンボジア基礎情報	6
PART2 トラム・クラ小学校	7
PART3 ベン・ロヴィア・レー小学校	11
PART4 トム・オー小学校	14
PART5 現地課題調査報告	20
PART6 メンバーの感想	23
二年生	24
一年生	33
PART7 おわりに	40

# PART1

はじめに

# 団体紹介

私たちは、麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力（IEC）専攻の3年生8名、2年生8名、1年生4名、グローバル人材育成専攻2年生1名、日本語・国際コミュニケーション（JIC）専攻1年生1名の合計21名で活動している国際協力団体 Plas+です。「プラス」と読んでください。

Plas+とは“Present love to all students”の略で、“すべての子どもたちに愛を”、をモットーに活動を行っています。映画『僕たちは世界を変えることができない』に感化され、「私たちがカンボジアで何かしたい!」と考え、2014年4月26日に団体を発足しました。

現在は、一般財団法人麗澤海外開発協会（RODA）が、小学校建設の際に資金援助したトム・オー小学校、ベン・ロヴィア・レー小学校、トラム・クラール小学校を拠点とし、3校で様々な活動を展開しています。また2016年度から新たにフィリピンを拠点地に加え、カンボジア、フィリピン、日本の3か国で国際交流・国際協力を行っています。

## Plas+のこれまで

結成1年目は、カンボジアや国際協力について学習を始め、私たちにできることを探しに初めて現地を訪れました。しかし、カンボジアの実情と国際協力の難しさを痛感し、現実に打ちのめされてしまいました。

それでも私たちにできることを探すために、2年目からは自主企画ゼミナールとして Plas+の活動を申請し、大学にも認知される団体となりました。そして担当教員である麗澤大学外国語学部講師（当時）の内尾太一先生と共に、インタビューリレーをという活動を始めました。

インタビューリレーとは、カンボジアに詳しい専門家やゆかりある方を訪れ、これまでのご経験についてお話を聴かせて頂き、その方に次のインタビュー協力者の紹介をお願いする、というものです。

インタビュー協力者のカンボジアに関するエピソードやカンボジアでの国際協力についてお聴きするとともに、これまで20名近くの専門家に「学生の私たちにできることは何か」という共通質問をして、様々な意見やアドバイスを頂きました。それらのアドバイスを基に私たちが考案したものが出前授業でした。

また昨年からは、プラスコールという活動を新たに始めました。プラスコールとはインタビューリレーとは別に活動の分野や国にとらわれず、私たちが「お話を聞きたい!」と思

った方を迎えし、授業や講話をしていただき自分たちの知識を深めようと言うものです。始めたばかりの活動ですが、沢山の方に経験に関するお話やアドバイスをいただいて今後の活動の参考にさせていただきたいと思っています。

これまでカンボジアには、団体として公式に8度訪れており、その度に出前授業を行っており、国内でも国際協力について、また、カンボジアやフィリピンの良さを伝える出前授業を展開しています。一昨年から活動拠点に加えたフィリピンでも、課題解決型のプロジェクト形成を開始しました。昨年はセブ島へ団体として初の公式渡航をし、現地の状況調査と小学校での交流を行いました。

## お世話になった方々

### 【日本】

- ・木下廣太郎さん<一般財団法人麗澤海外開発協会(RODA)常務理事>
- ・林真市さん<株式会社林旅製作所>

### 【カンボジア】

- ・ソパートさん、レアさん：ガイド、通訳
- ・ソクさん、シムさん：ドライバー
- ・チャーチさん：ガイド
- ・レアヴ・ティナさん、ハイ・ロンヴェイさん、ミアツ・サムボーさん、ティー・ブンチャンさん、クオン・ティアティーさん、フォウツ・メイグ・ベツさん：トム・オー小学校教員
- ・ネアン・ネンさん、パアンダ・リタさん、スアン・ボパーさん、ネアン・ソペアさん、ウウン・チャンニーさん、ヘイアング・セエンハアンさん：トラム・クラ小学校教員
- ・チェアツ・ソケアンさん、ウウム・ソヴァンニーさん、ケット・ソピアさん：ベン・ロヴィア・レー小学校教員
- ・酒井恵理子さん：クックマ孤児院訪問の受け入れ<NPO 法人グローブジャングル>
- ・ラトキヨさん<在カンボジア日本国大使館>

その他にも今回の渡航にあたり、多くの方々にご協力いただきました。この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

本当に、どうもありがとうございました。

# カンボジア王国基礎情報

## 【カンボジア王国の基本情報】

首都：プノンペン

人口：1567.7 万人

面積：18.1 万km<sup>2</sup>

一人当たりの国内総所得：950 米ドル

公用語：カンボジア語（クメール語）

主要産業：農業・縫製業・建設業・観光業



## 【近代以降の略史】

1863 年 フランスの保護国となる。

1887 年 フランス領インドシナに編入される。

1945 年 カンボジア王国として独立を宣言する。

1947 年 フランス連合内で限定独立を遂げる。

1953 年 完全独立を獲得する。

1970 年 親米のロン＝ノル将軍が実権を掌握する。共和制へ移行したが、内戦が始まる。

1975 年 クメール＝ルージュがプノンペンを陥落させ、実権を掌握し、民主カンボジア政権（ポル＝ポト政権）が樹立する。この間、大量虐殺が実行される。

1979 年 ベトナム軍の支援で救国民族統一戦線がプノンペンを侵略し、カンプチア人民共和国（ヘン＝サムリン政権）を樹立する。

1982 年 ロン＝ノルのクーデターで追放されていた元国家元首シアヌー クらが民主カンボジア連合政府を樹立し、内戦が激化する。

1989 年 ベトナム軍が完全撤退する。

1993 年 王政が復活し、現在まで続くカンボジア王国が誕生する。

【参考 二宮書店編集部 (2016)「カンボジア王国」

『データブック・オブ・ザ・ワールド 2016 年度版』 pp.186~188、二宮書店。

# PART 2

トラム・クラー

小学校

## 小学校の基礎情報

名称：トラム・クラーク小学校

生徒：176人 ※2020年2月渡航調査によるデータより

校長：ネアン・ネン先生

教員：7名 パアンダ・リタ先生、スアン・ボパー先生、ネアン・ソペア先生、  
ウウン・チャンニー先生、ヘィアング・セエン・ハアン先生

主要科目：国語、算数、理科、社会、体育（簡易的なもの）、英語（4～6年生）  
（午前と午後の2部制）

管轄：カンボジア政府

## 日本文化授業 大縄跳び

【担当】大谷、丸山

### 【目的】

- ① 大縄跳びを通して現地の子どもたち同士の団結心、思いやりの精神を養うと共に、交流し互いに有意義な時間を共有する。
- ② 今までの渡航経験から子どもたちは体を動かすのが好きと認知しているので、日本の小学生が行う大縄跳びを行い、楽しみながら国際交流をはかる。

### 【チーム構成】

子どもたちを4つのチームにわけ、Plas+メンバー2人が縄を回す。

カウンターパートや先生は、適宜指示出しをしてもらうために間に入ってもらう。

赤チーム：増子、阿部

青チーム：後藤、曾我

緑チーム：山口、レア

黄チーム：入江、佐藤

### 【授業の流れ】

- ① 競技説明
- ② Plas+メンバーでデモンストレーション
- ③ 準備体操

- ④ 20分ほどの練習
- ⑤ 5分間の本番
- ⑥ 結果発表

#### 【全体ルール】

八の字跳び

本番の5分間の中で一番多く跳べたチームが勝ち

縄を潜り抜けたり、引っかかったりした場合はカウントしない

#### 【必要な道具】

- ・4色のゼッケン（カラーフェルト、安全ピン、黒ペン）
- ・縄（25m×4）
- ・記録用紙

#### 【大縄跳び内容】

##### ① 競技説明（担当：大谷）

なるべく簡単な日本語、単純なルールの説明を大谷が子どもたちに日本語で説明し、それをカウンターパートに訳してもらった。理解しているかどうかを適宜確認しながら行った。

##### ② Plas+メンバーでデモンストレーション（担当：阿部 後藤 大谷 若松 増子）

子どもたちが言葉だけでなく目で見て理解できるように Plas+メンバー数人で実際に跳んだ。

##### ③ 準備体操（担当：大谷）

日本で行われている準備運動（屈伸や伸脚など）をクメール語で「モイ、ピー、バイ」（1,2,3!）と、子どもたちと声を合わせて行った。担当者の大谷が前に立ち、子どもたちに動きを真似してもらった形で体操を行った。

##### ④ 20分ほどの練習（担当：大谷）

適切な距離をあけて4つのチームにわかれてもらい、各チームに所属する Plas+メンバーそれぞれが主導する形で約20分間跳ぶ練習を行った。後半になるとスムーズに跳べる子も増え、楽しんでいる様子だった。

##### ⑤ 5分間の本番（担当：大谷）

5分間の中でどれだけ多く跳べるかを4つのチームで競った。はじめは連続回数をカウ

ントする予定だったが予想以上に難しそうだったため、合計の回数に変更した。

⑥ 結果発表（担当：大谷）

大谷が子どもたちの前に出て本番の結果を発表した。回数に一喜一憂している子どもも多く楽しんでくれている様子が伝わってきた。

【授業を振り返って】

今回、時間が想定より少なく子どもたちと交流できる時間は限られていたが日本文化の一環として大縄跳びで子どもたちと一緒に体を動かせたのは非常に良かった。大縄跳びを知らない子がほとんどだったがカウンターパートの方たちや先生方のおかげでスムーズに理解してもらうことができた。特に Plas+メンバーで実演できたことはこの点において大きかったと思う。先述の通り時間が想定より少なかったり前日でのルール変更だったり臨機応変に対応しなければならない場面が多かったが Plas+メンバーのおかげでなんとか形にはなったと思う。特に子供たちが笑顔を絶やさないほど楽しんでくれていたことはな反省点の成功はやはり備格や年齢、運動能力の差で跳べる子と跳べない子がはっきりわかれてしまっていた点だ。縄のスピードを遅くしたり掛け声をかけたりして対応したが、もう少し対応策を練っておくべきだと強く感じた。

# PART 3

ベン・ロヴィア・レー

小学校

# 出前授業 音楽

【担当】高橋、田村、阿部、猪野、入江、蘇我、若松

## 【目的】

- ・楽器を使って演奏する事の楽しさを知ってもらう
- ・全員で合わせる合奏の楽しさを知ってもらう
- ・感性を磨く
- ・日本の曲を知って貰う
- ・ニーズに応える

## 【準備した道具】

- ・マラカス（ペットボトルで作ったもの）
- ・カスタネット（牛乳パックで作ったもの）
- ・リコーダー
- ・鍵盤ハーモニカ

## 【授業の流れ】

- ① 楽器作成
- ② パート練習（上を向いて歩こう）
- ③ 本番（上を向いて歩こう）
- ④ パート練習（ARAPIYA）
- ⑤ 本番（ARAPIYA）

## 【授業内容】

- ① 楽器作成

授業の初めに、子ども達に自分の楽器に絵を書いてもらった。マラカスとカスタネット、ペットボトルと牛乳の紙パックを使って作った簡易的な物を使った。

- ② パート練習（上を向いて歩こう）

『上を向いて歩こう』の合奏の為の練習をして貰った。子ども達には、マラカスパートとカスタネットパートに分かれて貰った。Plas+のメンバーは前に出て演奏を一度見せた。その後は太鼓の音に合わせてそれぞれの楽器で子ども達にリズムを取って貰った。また、

リズムは Plas+が事前に考えたものである。

③ 本番（上を向いて歩こう）

本番はマラカスパート、カスタネットパートそして、Plas+の皆で合奏をした。合奏は完璧に合わせる事が出来なかった。特に低学年の子ども達が演奏していたカスタネットはそれぞれの叩くタイミングがバラバラであった。又、知らない曲に不思議な表情を浮かべている子どももいた。

④ パート練習（ARAPIYA）

②の時と同じ要領で進めて行った。高学年の子どもの中には少しづつコツを掴んでいる子どももいた。

⑤ 本番（ARAPIYA）

③の時と同じ要領で進めて行った。『ARAPIYA』の場合は、カンボジアでも有名な曲であったので、子ども達にとっては、合奏のコツが掴みやすかったのだろうと思う。なので、マラカスパートの子ども達は、リズムを取れていた。

【授業を振り返って】

音楽の授業は初の挑戦であった。Plas+のメンバーは柔軟な対応が出来たと思うが、沢山反省する事があった。特に顕著であったのが、教え方だ。音楽と聞くと、感覚的な部分が多いと思い込んでおり、視覚的に伝えることを怠ってしまった。対策として、簡易的な楽譜を用意するなどが出来たと反省した。また、日本国内での小学生に対しての音学の授業方法などを自分達の記憶だけでなく詳細に調べる必要があった。ヴェン・ロヴィア・レー小学校には音楽の教科書があるが、音楽の先生が在籍していない。これらから、情操教育である音楽の教え方、伝え方が授業の質向上に必要だと感じた。



# PART 4

## トム・オー小学校

# トム・オー小学校 運動会

【担当】佐藤、後藤、田中、渡部

## 【目的】

- ・Plas+のメンバーと子どもたち、現地の方々との親睦を深める。
- ・勝敗をつけることにより、喜びや悲しさ、仲間と協力することの大切さを体験する機会をつくる。
- ・ルールを定め、それを守ることで安全かつ公平に、競技を楽しむことができることを伝える。
- ・子どもたちの記憶に残る一生の思い出づくり。

【チーム構成】：(各3校に行った際、子どもたちのチーム編成をする)下線部＝運動会係  
トム・オー小学校生徒合計（当日参加者 53名）

赤：安部、佐藤(楓)、大谷、

青：後藤、須藤、曾我

黄：入江、増子、若松

緑：猪野、山口、田中

紫：カウンターパート、小学校の先生方

## 【競技の流れ】

- ① 準備体操（同時進行で競技の準備）
- ② 綱引き
- ③ 玉入れ

## 【全体のルール】

各競技（綱引きの場合、トーナメント形式で1位40点、2位30点、3位20点、4位10点と配点する。玉入れの場合、スコア形式（入った玉の個数）で1位40点、2位30点、

3位 20点、4位 10点と配点する。)で勝敗を決めて、順位を決める。2つの競技の総合得点で総合順位を決める。

#### 【必要なもの】

ゼッケン (カラーフェルト・安全ピン・黒マーカーペン)

チームコルクボード (コルクボード・色画用紙)

玉 (新聞紙・カラーテープ)

かご (\*現地で購入)

綱

#### 【運動会内容】

##### ① 準備体操 (担当: 後藤)

例年同様、日本でも行われている準備体操 (屈伸や伸脚など) をクメール語で「モイ、ピー、バイ」(1、2、3) と子ども達と声を合わせて行った。担当者の後藤が前に立ち、子ども達に真似してもらいながら準備体操を行った。

##### ② 綱引き (担当: 後藤)

トーナメント形式で実施。

1. チームごとに並ばず。
2. 1チーム vs 1チームで試合を行う。
3. 試合をするチームは綱の横に整列する。
4. 整列したら、手をあげて開始の合図を待つ。
5. 開始の合図で綱を掴み、引っ張る。
6. 綱の中央の部分が所定の位置を通過したら終了の合図を出す。
7. どちらのチームが勝ったかを伝える。
8. そのチームの Plus+メンバーについていき元々いた場所に戻る。

##### ③ 玉入れ (担当: 田中)

スコア形式 (入った玉の個数) で実施。

1. 40秒間、かごに球を入れ続ける。
2. 時間がきたら生徒はその場を離れ、座る。
3. かごの中に入った球を、同時に一級ずつ投げ、数をみんなで一緒に数える。
4. 数の多かったチームが勝利。

\* 競技者以外のチームは応援に励む。

### 【運動会を振り返って】

これまでのトム・オー小学校の運動会で綱引き、玉入れは実施したことがあり、その知識・経験を活かして、円滑に競技を実施することができた。また、昨年度の反省で上がった日陰の確保については、競技者以外は木陰から応援することができた。

綱引きは、1 試合目を行った際に傾斜のある場所で競技を行ってしまった為に、勝敗の公平性に欠けてしまった。その後、瞬時に競技場所を変更し、再試合を行った。メンバーからの指摘によって気づき、臨機応変に行動できたことは団体においても大きな収穫である。同様に、前日のミーティングでは運動会を行う上で必要なクメール語（色や数字から、座るなどの指示語）の共有をしたことで、競技の進行を円滑に行えた。

玉入れは、競技が始まる前に自分の所に予め玉を集めておくなどの工夫やスコア形式で勝敗がわかりやすいこともあり、子ども達の非常に楽しそうな表情が見られた。また競技者以外の子供達が競技者の子供達を応援する姿は、公正なプレーを尊重し、相手の選手に対する尊敬や賞賛、同じスポーツを競技する仲間としての意識をもって行われる活動であるという姿勢であり、大切なことを子ども達を感じる事ができていた。

結果発表の際は、総合得点の結果に喜びや悔しい表情が見られ、運動会自体の目的が達成できた。

細かい点への配慮（競技の説明をデモンストレーションすることによって、子ども達の競技の理解度がさらに高まったことや色分けと同時進行で競技準備を行うことによって、全体の時間短縮）が運動会の成功へと繋がった。このような些細な点に気を配り、質の高い出前授業を今後も実施していきたい。

# 日本文化授業 日本語教室 書道

【担当】 須藤、山口、大谷、増子、川畑

## 【目的】

- ・子どもたちに簡単な日本語を知ってもらう
- ・書道を通して日本文化・日本らしさを知ってもらう
- ・情操教育の一環として日本人の感性を体験してもらう

## 【授業の流れ】

- ① 日本語教室
- ② 日本語クイズ
- ③ 書道

## 【準備した道具】

- ・日本語教室
- 50音表(クメール語版)
- ・書道
- 筆、半紙、下敷き、墨汁、紙コップ、バケツ

## 【授業内容】

- ① 日本語教室(担当:山口)

『おはよう』『こんにちは』『こんばんは』『ありがとう』『さようなら』の5つの挨拶を

1つずつ、クメール語版の50音表を用いて発音した。後に続けて子どもたちが発音した。

- ② クイズ

上記の5つの挨拶に関するクイズを行った。例えば、『午前中に使う挨拶は何です

か?』など子どもたちが5つの言葉を覚えたかを確認した。

- ③ 書道(担当:増子)

まず初めに、子どもたちに書いてもらう字である「友」をPlas+メンバーがお手本で書いた。次に子どもたち一人一人に「友」を書いてもらった。最後に新たな半紙に自分の好きなように筆で書く時間を設け、日本文化に触れてもらった。

## 【日本語教室、書道を振り返って】

日本語教室<sup>1001</sup>では、私たち Plas+メンバーと挨拶<sup>1002</sup>が出来るようになるというねらいのもと授業を行った<sup>1003</sup>が、子どもたちは元気に発音をして挨拶を覚えてくれた。中にはメモを取っている子がいて、同時に子どもたちの勉強に対する熱心さを感じる事が出来た。子どもたちにとって日本語は少し難しかったかもしれないが、全員が大きな声で発音してくれたことにより、楽しく授業を進めることが出来た。また通訳がいたことによってより子どもたちに理解してもらうことが出来たと思う。子どもたちとの別れ際に、覚えた日書道では、苦戦した部分もあったが<sup>1004</sup>子どもたちが楽しんで書いていたことが印象的で本語を使ってくれている子がいて、私たちもとてもやりがいを感じる授業となった。

ある。<sup>1005</sup>子どもたちの人数が多かったことにより、<sup>1006</sup>Plas+の人数で子どもたちを見ることは少し苦労した部分もあったが、日本文化メンバー以外の Plas+の手厚いサポートにより大きな問題が起こることなく終えることが出来た。自分の好きなように半紙に書く時間の時語が通平な<sup>1007</sup>私たちは自分の名前通訳絵を<sup>1008</sup>書<sup>1009</sup>ではない<sup>1010</sup>子ども日本文化<sup>1011</sup>にたい興味<sup>1012</sup>持らな<sup>1013</sup>め<sup>1014</sup>思<sup>1015</sup>ら<sup>1016</sup>嬉<sup>1017</sup>に<sup>1018</sup>思<sup>1019</sup>かない部分が出てくるが、今後は私たちがより分かりやすく理解しやすい授業を展開して子どもたち全員が楽しめる授業にしていきたいと思う<sup>1020</sup>。

# PART 5

## 現地課題調査報告

# 拠点小学校 3 校における 現地課題調査

## 【目的】

- ・子どもたちがどのような環境で学習し、生活しているのかを知ること
- ・新たなプロジェクト立ち上げのための情報収集

## 【調査項目】

- ① 授業参観
- ② 家庭訪問
- ③ 学校敷地内調査
- ④ 子どもたちへ質問
- ⑤ 先生へ質問
- ⑥ 市長または村長へ質問

## 【調査内容】

### ① 授業参観

普段の授業の様子を知りたかったため、教室にビデオを設置させていただき撮影した。ゲストハウスに戻ってから動画を共有し、どのように授業が行われているのか見た。真剣に机に向かい勉強している子どもたちの様子が見られた。また、授業の進め方やクラスの規模など日本の小学校との共通点や相違点も見られた。

### ② 家庭訪問

授業を撮影している間に Plas+メンバーは 2 グループに分かれ、小学校周辺の家々を回り話を聞いた。村の生活や家庭での子どもたちについて質問し、学校外での子どもたちの様子や家庭から見た学校のイメージを知ることができた。

### ③ 学校敷地内調査

設備の老朽化や清潔度、危険な所はないかなど状況を確認した。実際に学校を見て回り事前に用意したチェックリストに状況を書き込んだ。見返せるように各場所で写真を撮った。

### ④ 子どもたちへ質問

子どもたちを 2 つの教室に分け、それぞれの教室で「将来の夢は何か」「普段放課後に何をしているのか」「興味・関心があることは何か」の 3 つを聞いた。子どもたちは恥ずか

しがりながらも手を挙げて答えてくれた。

⑤ 先生へ質問

小学校の最新版の基礎情報や授業の行われ方、先生から見た子どもたちの様子などを質問した。

⑥ 市長または村長へ質問

村の基礎情報や村長から見た村での問題を聞いた。

【現地課題調査を振り返って】

初めて調査を行ったトラム・クラ小学校では、慣れない調査に改善点が複数挙がった。例えば子どもたちに質問する際、通訳と意思疎通がとれず、質問するのが難しい場面があった。また家庭訪問の際には、炎天下の中で長時間話を聞いて回るのが体力的に厳しいことが分かった。トラム・クラ小学校での反省を活かし、残り2校ではあらかじめ質問文を訳したり、調査時間を短くするなどしてより良い調査に努めた。小学校の先生方や地域の方々の協力があり、予定していたすべての調査を行うことができた。

調査全体の反省としては、2グループに分けたことで多くの情報を得られた反面、訳し方の違いで質問に対する回答の方向性が若干異なっている部分があったこと、また質問をどこまで深く追求するか不明確だったことが挙げられる。Plas+メンバーだけでなく通訳を加えて全体ミーティングをする必要があると感じた。この調査を通して、3校それぞれの特徴を把握することができた。また、先生方の意見だけでなく、子どもたち・親・村長など複数の視点から子どもたちのことをさらに知ることができた。今回調査で得たものを基に、Plas+が子どもたちのためにできることを考えていきたい。

# PART 6

## メンバーの感想

阿部明香里

国際交流・国際協力専攻 2 年

先輩としての渡航



#### 【はじめに】

今回のカンボジア渡航は、1年生にとっては初めてのカンボジア、2年生にとっては自分たちでPlas+を引っ張っていく初めての渡航になった。去年の私は、先輩のあとを付いて歩き、初めて訪れるカンボジアを純粹に楽しんでた。しかし今年は、Plas+が無事に渡航を終えること、また1年生にカンボジアの魅力を伝えることという2つの使命を背負い、期待よりも不安を抱えながら2週間の渡航が始まった。

#### 【活動と学び】

今回の渡航では昨年に引き続き、トラム・クラー小学校、ベン・ロヴィア・レー小学校、トム・オー小学校の3校で活動を行った。前回渡航で挙げたニーズに沿って日本文化や運動会、音楽の出前授業を実施した。子どもたちの笑顔や真剣に取り組む様子が見られたことがとても嬉しかった。メンバー同士の連携が取れていたこともあり大きな問題もなく終えることができた。しかし持ち物の確認が不十分だったことで臨機応変な対応が求められる場面がしばしばあり、次回の授業実施時にはこの点に注意していきたい。出前授業に加えて今回は現地調査も行った。現地調査では家庭訪問や授業参観など、いつもの渡航より、様々な視点から村の子どもたちの実態を知ることができた。新たな発見が多々あり、今まで気づいていなかったことや勝手に抱いていた思い込みに気づかされた。この調査を無駄にせず、子どもたちのためにPlas+ができることを考えて実行したい。

今回初めて私たち2年生が渡航を取り仕切り、団体を背負う自覚と責任を感じる2週間となった。常に全体を見ながら、日程やお金、メンバーの体調など様々な点に配慮して管理するのは想像以上に大変だった。今まで大変な表情を見せることなく全てをこなしていた先輩方には改めて感謝と尊敬の念を覚えた。しかし全体を見ていたことで、Plas+メンバー1人ひとりをより知ることができ、活動一つひとつにも深く関わられたため、楽しみながらも学ぶことが多くあった。出前授業や現地調査も含め非常に収穫のある渡航となった。

## 【最後に】

期待より不安を抱えながら出発したカンボジア渡航は、体調不良者の続出やハプニングなどありつつも、なんとか無事に終えることができた。渡航を通して昨年以上に人との繋がりができ、Plas+がどれだけ多くの人に支えられているのか分かった。感謝を忘れず、子どもたちのためにこれからも活動を行っていこうと改めて決心した。Plas+と過ごした2週間は私にとってかけがえのない日々で、またみんなと大好きなカンボジアに訪れたいと強く思う。

猪野 遥人

国際交流・国際協力専攻2年

難しさと覚悟



## 【はじめに】

私は、現地で出前授業と現地調査を目的に渡航を行なった。今回の渡航では、二年生は現地での最高学年として活動をした。活動を成功させる事へのプレッシャーなどは少なからずあったが、ピリピリとした空気感になる事は少なかったと感じた。二年生の長所を2年目にして新たに見つけられた。今回のカンボジア渡航では良い事も、そうでない事も様々出会ったが、その時に感じた事を踏まえてこれから振り返って行く。

## 【活動】

最高学年として挑んだ今回の渡航で私は、ハンバーガーのピクルスに中ってしまい渡航序盤で38度以上の熱を出し、カンボジアの病院を初めて利用した。とても迷惑をかけてしまったと反省し、悔しさも感じた。何故なら翌日に現地調査を控えていたからである。半年間準備して来たものが現地調査の前日で達成出来なくなってしまったと落ち込んだ。しかし、Plas+のメンバー、カウンターパート、ドライバーの皆が予定を変更し、私も現地調査が出来るようなスケジュールに組み直してくれたのだ。迷惑をかけたのにも関わらず、それでも尚、心配をしてくれたメンバーの温かさを感じ、感動して涙がでた。団体として動く事の難しさを実感してきた年であったが、この時ばかりは団体であるが故の心強さを実感出来た。そうして実現出来た出前授業と現地調査では、とにかく暑さとの戦いであった。出前授業では、1年生がフィリピンでの経験を生かし、率先して携わっていた。

現地調査では、予定していた質問は聞いた。やるべき事はやった。計画していた全てを終えた感想をまとめとして話す。

### 【最後に】

今回行った現地調査をプロジェクトとして、どれだけ村に還元出来るだろうと疑問に思った。これは現地調査をして初めて感じた事だが、村ひとつでも全部を知ることは出来ず、今回知れたのは一部だけである。これをプロジェクトにする際により多くの情報が必要になる。それは人口などの数字だけでなく、現地の人々の感情も大切になる。情報であふれている世界だからこそ何が本当で、どの感情がそこに確かに存在するのかを目で見て感じ、何をすべきかを考え、この流れを粘り強くやる事が、大切である。許す限り何度でもカンボジアへ行き、現地の人々と向き合おうと今回の渡航で覚悟をする事が出来た。また、プロジェクトを考えて行く中で見失ってはいけない事があると思っている。それはマザーテレサの言葉を借りてしまうが、「大切なのは、どれだけ多くを施したかではなく、どれだけ多くの愛を込めたか、大切なのは、どれだけ多くを与えたかではなく、それを与える事にどれだけ愛を込めたか」と言う事だ。これだけは忘れずに進んでゆきたいとカンボジアで感じた。

入江翔大

国際交流・国際協力専攻2年

「笑」



### 【はじめに】

今回の渡航が私にとって Plas+として行く最後のカンボジア渡航になるかもしれない。そう腹を括って挑んだカンボジアは去年とは違って見えた。

### 【学び】

去年カンボジアを訪れた時にできたマーケットの友達、通訳・ドライバーの友達、そして小学校、中学校にいる沢山の友達、今年はその友達との仲を深めるだけではなく、さらに多くの友達を作ろうと意気込んでいた。私はボランティアとは言いたくなく、それによ

って生まれる関係が嫌いだ。できるだけ友達のような感覚で、しかしリスペクトは持ちつつ接していきたい。今回は最後になるかもしれないという思いもあったため、より多くの人たちと交流することに重きを置いた。私は、普段から言っているが言語はパッションだと思っている。拙いクメール語でも話してみると伝わるまで聞いてくれる、伝わらなかったら笑ってくれる。郷に入っては郷に従えではないが、その国の習慣、言葉を積極的に使っていくことが大切だと今回の渡航で再認識した。相手が知っている人であれ、その時は全く知らない人でも笑ってくれるだけで自分まで嬉しくなってしまう。それを去年も感じていた。去年はあまり何も考えず現地の人たちと交流がしたかっただけだったが、今年もその根本的な部分は変わっていない。しかし、一つ去年と変わった部分はお互いの思い出になりたいということだ。去年はただ交流して終わりだったが、今年はより深い関係で一緒に楽しみたかった。正直に言ってしまうと Plas+ のメンバーには集団行動が苦手な山崎を迷惑させたが、日本にいても話すことはできる。私は、その時にしか顔を合わせて話すことができないカンボジアの人との交流を大切にしたい。今回の渡航では、自分が当初目標にしていた以上にたくさんのカンボジアの人たちと大切な時間を過ごすことができた。

はじめにの導入の部分で、カンボジアが違って見えたという点と前述したが、どのように違って見えたのかを最後に振り返って終わりにしたい。

#### 【最後に】

カンボジアが違って見えたというのもカンボジアが変わったのではなく、私の中でのカンボジアに対する感情が変わった。今まではただ海外が好きだからカンボジアも楽しい、カンボジア人面白いというような感覚だった。しかし、今回の渡航で根本的なところから見方が変わった。もう Plas+ として渡航することはないかもしれないという思いもあるが、今までのただ海外な好きな自分から今回の渡航を終え、自分に関わってくれた方々にずっと笑っていて欲しいと思うようになった。自分がまた一回り成長できたと実感した。

最後に、カンボジアで仲良くなった全員、そして Plas+ メンバーにはいつまでも笑っていて欲しい。

後藤亮一

グローバル人材育成専攻 2年

上級生として得られた視点

「オークン」の大切さ



### 【はじめに】

何もかも知らない「無知」の状態から渡航準備が始まった。同期と毎日のように連絡を交わし、気づいたら渡航前日を迎えていた。出発の成田空港では、この渡航で現地調査を完了しなければならない使命感に駆られる一方で、全員が無事に帰国できるかという2つの感情で葛藤していた。

### 【カンボジアでの日々】

カンボジアという日本とは異なる環境に加えて、食事代の計算やスケジュール調整に追われ、ご飯を美味しく感じる事が昨年比べて少なくなっていた。昨年の見るもの景色の全てがキラキラしていて、美味しくご飯を食べている自分の姿がそこにはなかった。それだけでなく、徐々に体調が悪くなっていくメンバー、ストレスが募り、少しずつチームとしての歯車が合わなくなっていった。そして私は一旦考え、悩む事をやめた。どうしたらいいのかと言葉を探しても自分には分からなくて、無力さを感じるばかりだった。何よりもその判断基準はすべて自分自身であり、自己中心的に物事を決めつけていた事が分かった。

そのような事を村の夜空を見ながら考えていると、1人の後輩が「大丈夫ですか」と話しかけてくれて、この一言に救われた。私は渡航を達成しなければならない事で一杯になり、仲間に対する配慮が足りなかった。配慮とは具体的に何が足りなかったのか考え還元していくと、「オークン」（クメール語でありがとうという意味）の一言であった。現地のカウンターパートの人々は必ずと言っていいほど、この言葉を交わしていた。仲間に対するリスペクトがどれだけ大切な事であるのか思い知らされた。これこそが上級生として得られた視点だった。

### 【最後に】

昨年のカンボジア渡航報告書にも、同様の内容の個人感想を書いた。私にとってカンボジアとは、人間として当たり前を持たなければならない事を忘れかけている自分に優しく教えてくれる、そんな国である。新しい何かを求めることは人生においてワクワクする事

であるが、当たり前として存在しているものに対して感謝し、言葉で伝えることが私にとっては何よりも大切なことであり、これこそが私の大好きなカンボジアが教えてくれたことである。そんなカンボジアに、「オークン」。

佐藤 楓

国際交流・国際協力専攻2年

2度目カンボジア渡航を経て



#### 【はじめに】

今回、私は Plas+として2回目のカンボジア渡航であった。また、1・2年生だけの渡航であり私たち2年生が最高学年として後輩を連れて行くという立場でもあった。たった1回しか経験していないことを存分に引き出せるかと不安も多くあったが、大好きになったカンボジアに再び訪れることや子ども達、カウンターパートなど現地の方々に再会できることがとても楽しみでもあった。そんな気持ちの中、渡ったカンボジアでの活動を振り返っていこうと思う。

#### 【活動・学び】

今回の活動は前回から訪れている、トラム・クラ小学校、ベン・ロヴィア・レー小学校、トム・オー小学校の3校を訪れ、前回挙げたニーズをもとに出前授業を実施した。そして、現地の生活や環境を知るため、新プロジェクトを立ち上げるための情報収集として小学校の子ども達、先生方、保護者、村の村長さんなどに村や家庭についての質問をし現地課題調査を行った。出前授業では、運動会、日本文化として大縄、日本語の授業、音楽の授業を実施した。全体を通して振り返ると前回やフィリピン渡航での経験があるので反省点は出たものの、進行などは経験を活かすことができたと思う。これからは今までの反省点をもっと活かしていければいいなとも思った。また、現地課題調査は、初めてのことであったが大きな収穫になったと感じた。今まで私たちが知らなかったことが多くあり、新たな知識が増えた。そして、今の小学校や村に対して何が一番必要なのか、何が一番大きな課題なのかを考えさせられる調査になった。

渡航前に立てていたスケジュールより大幅に変更した部分もあったが、それぞれ自分たちが出来る範囲内で全力を注いだ渡航にもなったと感じる。

先輩としての立場からして、まだまだ自分は同期に頼ってしまう場面が多々あった。もっと周りを見て協力し合えるとさらに良い渡航になったのではないかと思った。

### 【最後に】

自分達が初めて最高学年として渡ったカンボジア。まだまだ足りない部分はあるけれど、今回得た知識、経験をもとにこれからの渡航や Plas+での活動、その他自分の人生に大きく繋がれば嬉しい。ほぼわからない状態で、渡航前にたくさんサポートしていただいた先輩方、先生方、一般財団法人麗澤海外開発協会（RODA）の方々や渡航中にサポートいただいたカウンターパート、小学校の先生方など、お互い助け合いながら過ごした同期、何もわからないまま必死について来てくれた後輩に感謝している。私の中であったたくさんの発見をこれから様々なことに活かしていこうと思う渡航であった。

須藤大介

国際交流・国際協力専攻 2年

「経験」



### 【はじめに】

昨年度私はカンボジア渡航に参加することができなかった。そのため、今回の渡航は私にとって初めてのカンボジア訪問だった。今まで Plas+メンバーから聞いたことしかなかった場所に実際に訪れて、多くのことを経験することができた。

### 【私が見た景色と学んだこと】

今回の渡航は調査を主な目的とした渡航だった。そこでは現地の小学校に通う生徒をはじめ、村に住む人たちの話から今何に困っているのかまで聞くことができた。

今回の調査で私は知識だけでなく多くのことを学ぶことができた。

小学校では調査だけでなく、交流を目的とした出前授業も行った。そこでは子ども達の可愛さ、無邪気さ、笑顔には言語の壁がないこと、その一方で情操教育が行き届いていないことや生活で困っていることを知らせてもらった。カンボジアの授業のカリキュラムに

も情操教育はあるが、音楽では歌を歌う、体育は軽い運動程度の授業だそうだ。私はそこで日本のような情操教育の重要性を知った。

また、渡航中は観光をする時間もあった。アンコールワット遺跡群などを訪れ、歴史を知ることができた。実際に自分の目で見た景色は想像をはるかに超えるものだった。

### 【最後に】

カンボジアではフィリピンとは異なり、子ども達に英語が通じないため、コミュニケーションをとるのに苦労すると思っていた。しかし、実際には言語は通じないものの、お互いに相手に気持ちを表情から察してコミュニケーションと取ることができ、とても楽しい時間を過ごすことができた。

今回の渡航で見た景色、得た経験が無駄にせず、今後も子ども達との交流を続けて、Present Love をしていきたいと思う。

山口玖美伽

国際交流・国際協力専攻2年

カンボジア渡航



### 【はじめに】

Plas+として2回目のカンボジア渡航。子どもたちに会える楽しさと、新たな挑戦への不安が混じりながらの渡航だった。今年の渡航は2年生が最上級生であったため、自分のことばかりではなく周りを見る機会が多かった。そのため、去年よりも学ぶものが多くあった。楽しいだけではなかったが、また一つ思い出となったこの渡航を振り返ってほしいと思う。

### 【活動・学び】

渡航前、私たちは多くの学年ミーティングを重ねた。新たな挑戦をするために色々な人からのアドバイスを受けながら試行錯誤を繰り返した。去年は初めてのカンボジア渡航でただ先輩方について行き楽しんでいて、今年は最上級生として行く事になったため、2年生の誰もが不安を抱えていたと思う。それでも渡航を成功させるために一人一人が自分の役割を果たし活動を行えた事、は、1年生の頃と比べて成長した部分である。今年も去年と同様3校の小学校で活動を行った。そして今年は新たに出前授業に加え家庭訪問、授業参観、小学校調査を行った。これらを行った理由は新たにプロジェクト形成をするためである。今までPlas+の活動としては出前授業しか行ったことがなかったため、村の人々の生活や普段の学校での子どもたちの様子を知る機会がなかった。しかし、これらの活動を行ったことで村に対する視野が広がったと思う。この調査をもとにより良いプロジェクトを立てていきたいと思う。また、私は何より子どもたちに会えることを本当に楽しみにしていた。人懐っこいカンボジアの子どもたちは元気や勇気をくれて、落ち込むことがあっても自然と子どもたちの顔が浮かぶほど大きな存在である。子どもたちだけではない。カンボジア人は本当に温かい人がたくさんいて自然と笑顔が増える。この2週間、Plas+メンバーはもちろん、カンボジア人にもたくさん支えられた。本当に感謝の気持ちでいっぱいである。私も人に笑顔や希望を与えられる存在になりたいと思う。

### 【最後に】

最上級生として行く渡航は不安な気持ちであったが大きな怪我や事故もなく無事に全員が帰ってこれて安堵の気持ちでいっぱいだ。渡航中は周りを見ることがとても多かった。何より初めて行く1年生の命を守ること、それが1番の責任であった。中には体調を崩す子もいたが、みんなが子どもたちと楽しんでいる様子を見て本当に嬉しく感じた。この渡航を通して学んだことをこれからの活動に活かし、Plas+の活動がより良いものになるように頑張りたい。そしてこれからも多くの子どもたちに present love をしていきたい。

大谷佑真

国際交流・国際協力専攻 1年

「渡航を通して学んだこと」



【はじめに】

今回の渡航は私たち1年生にとって半年前のフィリピン・セブ島に次ぐ2回目のものであった。Wi-fiがある場所以外では携帯が繋がらないことが当たり前だったので2週間は、人同士の繋がりを強く感じるものだった。現地での活動を円滑に進められるように様々なことを手配してくださったカウンターパートや、私たちが訪れた3つの村に住む人たち、その他多くの方が助けてくださったおかげで特に大きな問題もなく現地での生活することが出来た。食あたりで寝込むことになった私を介抱してくださった先輩方や同級生にも感謝している。今回は、あらゆる人への感謝という当たり前のことに気付かされた渡航だった。

【活動、学び】

今回、私たちは3つの小学校での出前授業と新しい試みとして現地調査を3つの村で行った。私が担当した出前授業は大縄跳び、日本語の挨拶、習字の3つを合わせた日本文化で、特に大縄跳びは進行役を任せていただいた。フィリピンの時は先輩の後につくだけだったが今回は自分が指示を出して子どもたちを動かしていかなければならないということがとても不安だった。結果時間が足りなかったり場所が狭かったりと想定外のことはありつつも Plas+メンバーの協力もあってなんとか形にはなった。特に子どもたちが楽しんで活動してくれていたのはなよりの成功だと思う。事前準備の不足や指示が通りにくかった等の反省点は次回以降の渡航で活かしていきたい。他にも日本語の挨拶や習字もノートを取ったり子ども同士で相談したりと積極的に学ぼうとしてくれる姿勢が見て取れ、嬉しかった。現地の縄跳びの目的は確か他の活動を探すと大変で、帰国後、笑顔指差しをする子どもが胸が熱くなる分かれて小学校に通う子どもの保護者や先生、村長にいくつか質問をさせていただいた。私は録音を担当した。実際に家にお邪魔し時間をいただいたのでそのご好意を無駄にしないよう日本での活動をしっかり煮詰めていきたい。

### 【最後に】

今回の渡航は学ばせていただくことが本当に多かった。特に冒頭で述べた人への感謝は頭では理解しつつもいつの間にかその意識が薄れてしまうことも多かった。今回させていただいた様々な経験を次回以降の渡航に活かし来年度入ってくるであろう後輩にも伝えていきたい。特に、カンボジアの人々のご好意を忘れず、次回以降の活動にしっかり繋げていきたい。

曾我希

国際交流・国際協力専攻 1年

初めてのカンボジア



### 【はじめに】

私は今回初めてカンボジア渡航を行った。先輩方から聞く話に期待を膨らませ挑んだ渡航。想像通りカンボジアは活気で溢れていて、人々が温かくとても素敵な国だった。これから渡航で感じた事を振り返っていきたいと思う。

### 【渡航で感じた事】

私は今回 3 校の小学校とくっくま孤児院へ訪れた。どこの子ども達も私達を見ると笑顔で駆け寄って来てくれた。その姿は本当に可愛らしく、言葉は通じなくても愛おしいと思えるような存在に出会えた事はフィリピン渡航同様、かけがえのない思い出となった。活動内容として今回は三校の小学校で出前授業と現地調査を行った。特に現地調査の一貫として行った家庭訪問は初めての試みであったが、実際の暮らしの様子を見る事ができ、今後のプロジェクトを立てていく上で貴重な情報を沢山得る事が出来た。何よりも突然訪れた私たちを笑顔で受け入れてくれた住民の方々には心から感謝したい。

そして行く前は長いと思っていた二週間も行ってみると本当にあっという間に過ぎてしまった。その中でも村で過ごした四日間は私にとって色々な事を考えさせられる時間となった。満点の星空や赤土だらけの道を見ながら、私は改めて自分一人では行かないような場所で、Plas+として現地の人と関わりながら活動出来る事がとても幸せな事だと実感した。同時にこの環境に居れる事に満足するだけでなく、今まで以上に自分に出来る present love

とは何なのかを考えていかななくてはいけないと思った。Plas+に入って約十ヶ月。私は今までただ先輩についていく事しかできていなかったと思う。渡航中においても金銭管理、交通手段、スケジュール管理など全てにおいて先輩に任せきりであった。改めて先輩の凄さを実感する事になったが、これからは先輩についていくだけではなく、Plas+の一員として一人ひとりの負担を減らせるような行動ができるようになりたい。

#### 【最後に】

今回の渡航では先輩方を始め、通訳の方、ドライバーの方、先生方、沢山の方のサポートがあり、素敵な時間を過ごす事が出来た。私達をサポートしてくださった全ての方への感謝を忘れずに、今後のPlas+としての活動に取り組んでいきたいと思う。

田中 紗也香

国際交流・国際協力専攻1年

初めてのカンボジア渡航を終えて



#### 【はじめに】

カンボジアは私がPlas+に入るきっかけをくれた場所で私は期待に心を躍らせていた。今回のカンボジア渡航は新型コロナウイルスの影響で家族に反対され、直前まで渡航に参加できるかわからなかった。しかし先輩が相談に乗ってくださったおかげで自分の渡航に対する気持ちを伝えることができ参加することができた。

言葉の壁や慣れない長距離の移動、初めて行う地域調査の活動など渡航がうまくいくのか不安もあった。しかしそんな不安を忘れさせてくれるくらいカンボジアという国や人々の温かさに触れた2週間になった。そんな渡航を振り返っていこうと思う。

#### 【活動と学んだこと】

今回の渡航で私は初めてカンボジアを訪れた。今回私たちは、トラム・クラ小學校、ベン・ロヴィア・レー小學校、トム・オー小學校の3校を訪れた。私たちが小學校につくと子どもたちは、どんな時でも教室から走ってきてくれて、私たちを出迎えてくれた。そして私の、不慣れなクメール語も理解しようとして聞いてくれる子どももいた。言葉は伝わらなくても子どもたちと一緒に活動でき、子どもたちの笑顔を見ることができただけでとて

も温かい気持ちになった。特に、私が担当する運動会の出前授業では、子どもたちが玉入れや綱引きをしている姿がとても印象的だった。私が指示をしていなくても子どもたちは、自主的に整列してくれたり、動いてくれた。日本語の出前授業で、一生懸命日本語を覚える姿を見たときは、「カンボジアにきてよかった」「Plas+に入ってよかった」と何度も思った。お別れの日も子どもたちは車で帰宅する私たちを走りながら追いかけてくれた。その姿は絶対に忘れない。私はたった数日間の活動だったが、勉強熱心で、いたずら好きで、素直で、まっすぐなカンボジアの子どもたちが大好きになった。そして大好きな子どもたちのために何かしてあげたいとさらに強く思うようになった。

小学校の先生をはじめ、村の人々や村長さんなど多くの方にインタビューをしたことにより、整備されていない小学校のトイレ、いつ怪我人が出るかわからないほど危険な井戸、文具が足りていないことなど自分が想像していたよりもはるかに多く問題点があることを知ることができた。何をしなければいけないのか、何が求められているのかが分かった渡航にすることができた Plas+は一段と強くなったように感じた。そして私たちは、この問題点に目を背けることなく、大好きな子どもたちに喜んでもらえるような意味のある活動していかなければいけないと改めて気が付くことのできる渡航になった。

#### 【最後に】

私はこの渡航でボランティアをしに行ったつもりが、反対に子どもたちから気が付かされたことの方が多かったように感じる。

子どもたちにまた会いたいと思える素敵な渡航にできたのは、渡航中どんなに疲れていてもいつも私を笑顔にしてくれた Plas+メンバーや、この渡航に関わってくださった方たちのおかげだと改めて感じた。その感謝を忘れずにこれからも大好きな Plas+メンバーと一緒に子どもたちにたくさん笑顔を届けていきたい。

増子みく

日本語・国際コミュニケーション専攻1年

発見と気づき



【はじめに】

初めてのカンボジア渡航ということもあり、楽しみと不安があり冒険的な気持ちでスタートを切った。また今回の渡航は、コロナウイルスの影響もあり体調の面での不安が大きかった。そんな中、両親に渡航を反対されていたが、私の中で自分なりの present love をカンボジアの方々に届けたいという思いが勝り、反対を押し切り渡航に参加することを決めた。そんなこともあり、私にとって思いの強い渡航となった。

【活動・学び】

今回の渡航は、出前授業だけでなく現地調査も加わったため内容の濃い渡航となった。小学校はベン・ロヴィア・レー小学校、トム・オー小学校、トラム・クラール小学校の3校を訪ねた。

ベン・ロヴィア・レー小学校では日本文化である大縄跳びを行なった。初めて大縄跳びをみる子どもたちは、興味津々であった。赤、黄、青、緑の四色に分かれて跳んだ回数を競いあった。競技となるとみんな真剣で、かつ楽しそうにしていた。順位発表の際は大いに盛り上がり、喜ぶチームも悔しがるチームもあり良い思い出となった。反省点として、石が沢山ある校庭で子どもたちは裸足で大縄跳びをしていたので怪我をしてしまう子も見られた。またプラスメンバー間の指示が回らず連携が図れなかったので、事前の流れをしっかりと確認して臨んでいくべきであった。

トム・オー小学校では運動会と書道を行なった。運動会は綱引きと玉入れを4チームに分かれ競技した。メンバー全員が役割を果たしていたこともあり、スムーズに行うことができた。また、メンバーが事前にクメール語での応援の言葉や指示する際に使う言葉など覚えていたため子どもたちと一緒に応援し、楽しむことができた。書道では、日本文化チームだけでなくメンバーの助けと協力があつたからこそスムーズにかつ、時間通りに実施することができた。子どもたちの中には I love japan と書いてくれる子もあり文化交流を果たすことができたと感じる。

トラム・クラール小学校では音楽の授業を行なった。事前にプラスメンバーが牛乳パックとペットボトルキャップを利用しカスタネットを、またペットボトルとビーズを用いてマラカスを作った。授業前半は、その楽器に各々絵を描いてもらった。お花や車などの絵を描き自分だけの楽器を作っていた。授業後半は、それを用いて日本の歌「上を向いて歩こう」とカンボジアの歌「アラピヤ」を演奏した。私たちの想像以上に、みんなで一つにな

り演奏する難しさを痛感した。考察として、子どもたちはよく歌を歌っていたので、次回からは合唱も良いのではないかと感じた。

現地調査は、各学校付近の家庭や学校周り、学校の先生方に協力していただき実施した。家庭では、奨学金の問題、文房具不足、人間関係などが挙げられた。学校周りは、ゴミが周辺に落ちていたり、衛生面などが挙げられた。これらの調査を基に今後の活動を考えていきたい。

### 【最後に】

今回の渡航は1、2年生だけであった。しかし私は先輩方に頼り切ってしまうと、渡航日程すら覚えない状態であった。今回の反省を含め、先輩方の姿を見て学んだことが多々あったので、次回この学びと経験を生かして自分で行動できる幅を広げていきたい。また、現地調査を経て、出前授業だけでは気づかないような問題点を発見することができたので、次の活動につながるような渡航となった。

若松佳子

国際交流・国際協力専攻1年

印象の違い



### 【はじめに】

今回、海外で初めて2週間という長い時間を過ごしてみてカンボジアの歴史に触れることができた。同様に小学校や家庭訪問などを通して多くの人と交流することができた。行きと帰りでは全く印象が違ったカンボジアという国にもっと興味を持つことができた。

### 【活動と学び】

初めて3校の小学校を訪れた際、子ども達の印象はそれぞれ違った。トラム・クラー小学校の生徒は、私達Plas+メンバーをすぐに受け入れてくれているようだった。私達がバンから降りた時にはかけ足でそばに来て、今日は何をするんだろうと期待の眼差しがたくさんあったのが印象的である。交流の際に使用した大縄1本でとても盛り上がり、お互いに応援しあい、掛け声も大きく、勝負に燃える子ども達のお陰で私のチームは見事1位をとることができた。あっという間の2日間であった。5時間くらいバンにゆられて初めての村生

活が始まった。次に訪れた小学校は、ベン・ロヴィア・レー小学校である。最初に会った際、比較的に大人しい子が多いのかと思ったが、それは初日だけであって 2 日目にはもう子ども達と追いかけてっこをしていた。音楽の授業を行った際、私達 Plas+メンバーには多くの反省点が残ったが、楽器に絵を描いている時、音を鳴らす時の子ども達はとても一生懸命であった。2 日目に小学校を訪れた際、しっかりと楽器を持ち歩いていることに音楽の授業をして良かったなと思うと同時に、これを機にもっとこのような授業が増えてくれたら来年にできる出前授業の目標が明確になるのではないかと思った。3 校目であるトム・オー小学校は他の 2 校とは何か違った。それは私達が小学校に来ることに對して、わかりやすく嬉しさを表現してくれることである。盛り上がる場所は盛り上がり、話を聞くとところは聞くというメリハリがあった。習字を使って交流をした際も初めて漢字を書くことに集中していて、授業がスムーズに進んでいるように思えた。3 校に共通することは、授業が終わればメンバーの周りをすぐに囲んで遊ぼうと誘ってくれることである。手を自分から握ってくれることが、私は信頼されているからなのかと思った。くっくま孤児院でも同じような場面があり、カンボジアの子ども達はとても人懐っこい子ばかりだという印象をもった。

#### 【最後に】

2 週間過ごしているうちにカンボジア人は、バイクの後ろに乗せてくれるほど優しく、フレンドリーな人が多いと印象を持った。言葉が通じなくても子ども達と交流ができ、出前授業を通して私達が何かを与えているのではなく、私達自身が子ども達から物事に励む大切さを教えてもらっているように思えた。来年もまた新しい出会いと共に変わらず待っている子ども達に present love をしたい。

# PART 7

おわりに

## 終わりに

Plas+として9度目の渡航の今回は、12人での渡航となり、人数が多い分準備がスムーズに行くなどのいい面、意見や心境の違いから衝突が起こる場面も多数見られたカンボジア渡航となりました。1年生にとっては初めてのカンボジア渡航、2年生は初めての後輩を連れての渡航、2年生は7人で後輩を抱え、メンバーそれぞれが不安と緊張に包まれた渡航でした。

今回の渡航は今までと違い、トム・オー小学校だけではなく、トラム・クラーク小学校とベン・ロヴィア・レー小学校の計3校を訪問、活動を行いました。『トム・オー小学校における安全な学び場づくりプロジェクト』も一段落つき、トラム・クラーク小学校では過去の経験を生かした交通安全に関する出前授業を行い、ベン・ロヴィア・レー小学校では要望があった日本文化の出前授業を行いました。

3校での出前授業は準備や体力的にも決して容易いことではなかったが、大人数であることを生かし助け合うことで、一人一人の負担をうまく調節できたのではないかと思います。仲間に手助けを求め、積極的に手伝い、一緒に活動するメンバーやPlas+に協力してくださる方々へ有難みを感じた渡航となりました。これからも3校とのつながりを深め、更なる支援や愛を届けられるよう誠心誠意、努めていきたいと思えます。

Plas+の日々の活動や今まで行ってきたプロジェクトは、ご協力して下さった皆さまがいなければ実現することができなかったと思えます。いつも見守ってくださっている皆さまへ、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。まだまだ至らない点が多い私たちですが、これからもご指導と応援を何卒よろしくお願い致します。

私たちPlas+は、周囲への感謝と、活動を行う地で愛をプレゼントする気持ちを忘れず、これからも活動に励んでいきます。